

〈図書紹介〉『人間本性論 第2巻(情念について)』デイヴィッド・ヒューム著 石川徹 / 中釜浩一 / 伊勢俊彦訳 法政大学出版局 二〇一一年

菅沢, 龍文 / SUGASAWA, Tatsubumi

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2013-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008788>

【図書紹介】

『人間本性論 第二巻 情念について』

デイヴィッド・ヒューム 著 石川徹／中釜浩一／伊勢俊彦 訳
法政大学出版局 二〇一一年

菅沢 龍文

ヒュームの『人間本性論』（『人性論』）にはすでに大槻春彦訳という一九五一年の名訳があるが、本書は新たに現代人に読みやすい翻訳となっている。本書は三部構成で、第一部では誇りと卑下、第二部では愛と憎しみが主題となり、これらは誰もが経験する情念（passion）であるが、本書では哲学的に分析される。誇りや卑下は、自他の比較により間接的に自己に対して生ずる。これに比べて、愛と憎しみは、他人に対して直接的に生ずる。それゆえ同じ性質でも、自分に認められる場合には誇りや卑下が生じ、他人に認められる場合には愛と憎しみが生ずる。

ヒュームはこれら四つの情念を正方形の四つの角に配置する。誇りと卑下の組と、愛と憎しみの組とは、対象の同一性によって結びついて、その結びつきが正方形の二本の対辺となる。その一方で、誇りと愛とは快い情念であり、憎しみと卑下とは不快な情念である点で結びついて、同じ正方形の別の二本の対辺となる。こうして、これら四つの

情念は対象に対する関係と、快不快といった感じへの関係との両者から生ずるとされる。

第三部は意志と直接的情念を扱い、自由と必然性の吟味から始まる。「自由すなわち偶然の説」をヒュームはとらない。なぜならこの説では、行為と人格との必然的な因果結合がなくなり、行為への人格の責任もなくなるからである。これに対して、「自発性の自由」は保持される。行為への意志作用は情念であって、これに対抗できるのも情念であり、真理と虚偽を判断する理性ではない。例えば、穏やかな情念が激しい情念を抑止するとき、穏やかな情念が理性なのではない。むしろ情念と密接に結びついて情念を引き起こすのは、想像力であるとされる。

以上は本書の内容の触りである。言うまでもなく本書はもっと多くの考察に溢れている。また、訳者の百頁以上に及ぶ「解説」は、本書の思想のかかえる問題や困難も指摘していて、ヒューム研究がさらに進展するうえで、よい刺激になるのではないだろうか。

原著 David Hume, *A Treatise of Human Nature*, Book

II, 'On the Passions', 1739.